

はムースの糞のチヨコレート包みまで登場する、大地の香りに満ちた、豪快で野趣あふれる野生料理の数々が、十八話に分けて紹介されている。

日本人には肉食人種の不気味さを感じてしまう向きもあるようだが、その本人が熱烈な自然保護論者であるところに、C·W·ニコルという人間の真髄がある。

「自然が好きでたまらないから、その恵みを感謝して受けるだけよ。生きるために、自分の領分を侵された時以外、ボクは絶対に動物は殺さないよ。動物は昔からお互いに殺しあい、食べあつていたね。それでいて全体のバランスはちゃんと保ってきた。それが本当の共存じやない? ほとんどの人間は、自分が動物の一種だということを忘れているよ」

独特的な自然哲学を聞いていると、観念的な動物愛護論者や、自然保護運動家の姿が、いかにも浅薄なものに見えてくる。自然に対する敬虔な祈りと感謝。

ニコルさんが日本に住みついたのも、捕鯨の問題が発端だった。

「外国ではクジラは養殖のミンクのえさになつてゐるね。金のために獲つてゐるだよ。でも、日本は人間が食べるためには捕鯨をする。それのどこが悪いの。そんなこと言うボクは、動物愛護の人たちに殺すと脅されたよ。でもその人たちが飼つてゐる犬や猫はエチオピアの子供の五人分のタンパク質をとつてゐるね。これおかしいんじゃない? 動物食べちゃいけないんなら、いつたい何を食べるの。麦や大豆をとるのに畑を作つたって、自然

破壊となるんじゃないの」

そして、江戸時代から現代までの日本の捕鯨の歴史をテーマにした長編小説の執筆を決意した。その取材のため、七五

年から一年間、和歌山県の太地に住んだ。小説の名は『勇魚(イサナ)』。原稿用紙二千枚の大作になるという。

現在の生活は、この小説の執筆を中心とする毎日。五木寛之の『戒嚴令の夜』の英文翻訳の仕事もある。余暇には野尻湖でカヌーをこぎ、空手の稽古に汗を流

テッド・コーリア

木版画を会得した水彩画家

松岡 春夫



コーリアさん

東京都府中市に住む彫刻家テッド・コーリアの生まれ故郷であるノバ・スコシア州は、カナダ東海岸の半島にある。ノバ・スコシアについて知識のない人でも、バーチー・モンゴメリの『赤毛のアン』でアンの活躍する舞台であるプリンス・エドワード島のすぐ近く、といえばその位置や自然環境が理解できると思う。

テッドが生まれたのは一九四七年。五人の兄弟姉妹のうち、長姉は主婦である

す。時には地元の獵友会の仲間と山へ入り、野ウサギ、タヌキ、カモなどを捕り、得意の料理の腕前を披露する。信濃の秋は早い。山々が真紅の紅葉に包まれ、厳しく美しい冬が巡つて来る日も近い。メルヴィルの『白鯨』にも匹敵する壮大な物語を書き続けるニコルさん。きょうも黒姫の大自然に向かって語りかかる。

「大地よ、風よ、水よ。イタタキマス」

(読売新聞文化部記者)

り、野ウサギ、タヌキ、カモなどを捕り、得意の料理の腕前を披露する。

日本の木版画との出会いはテッドの人生を大きく変えた。一九七二年、シルバーバーグのすすめもあって、木版画技法を習得する目的で初来日する。すでに著書などで知っていた木版画家吉田遠志を訪ね、プロの彫師、摺師の間に入つて日本

でテッド・コーリアの木版画の初の個展が催された。期間中に摺り増しするのでは知らなかつた」と語つてゐる。

一九七八年、東京・アメリカンクラブでテッド・コーリアの木版画の初の個展が催された。期間中に摺り増しするのでは知らなかつた」と語つてゐる。

がインテリアデザインを指導し、兄はカーラマン、弟は彫刻家、妹は詩人、末妹はモダンダンサー、テッドは画家と、それぞれ第一線の芸術家として活躍している。テッドは早くも四歳頃より絵画の才能をみせ、両親を驚かせ喜ばし、八歳で絵画コンテストに出品して入賞している。ノバ・スコシアの両親の家の居間や二階へ続く壁面には幼年時代からの作品が飾られているが、それらの作品は両親の誇りであり、町に住む人々の誰もが認める絵画への才能がきらめいている。

マウント・アリソン大学で美術を専攻し、画家であり、同大学の教授であるテッド・ポーファーに水彩画の伝統的技法を学び、またデイビッド・シルバーバーに日本の木版画を紹介される。

テッド・コーリアのもうひとつの顔はスポーツマンのそれだ。ホッケー、テニス、水泳、野球と何でもこなすが、特に

大変なほど、大好評だった。

テッドは、自然であるがままの対象が好きという。例えば、富士山中腹のほとんど崩れた廃屋、雪原に立つ枯れた木など、その構図が彼の水彩画のテーマだ。彼の作品には雪景や広大な自然がよく描かれる。しかし単に風光明媚な美しさを描くのではなく、人とそこに広がる宇宙を擱みとろうとする。今年三月の水彩画の個展に出品された『インテリア』は、民家の室内の太い柱、梁、床、障子等が人との触れあいから生じたそれぞの素材の持つぬくもりを描いていた。彼の目は光の影のようにいつも変化し、われわれの視覚から逃げてゆく対象をも適確にとらえている。

テッド・コーリアのもうひとつの顔はスポーツマンのそれだ。ホッケー、テニス、水泳、野球と何でもこなすが、特に